

常照

第861号

報恩講

報恩講は、浄土真宗を開かれた親鸞聖人の御命日に行われる仏事で、天台宗の霜月会、新義真言宗の報恩講、浄土宗の知恩講などにならって行われるようになったと言われています。みんなそれぞれに開祖・宗祖のご命日を大事に勤められていることがよくわかります。

親鸞聖人が亡くなったのは旧暦の十

一月二十八日(太陽暦では一月十六日)。

親鸞聖人の曾孫にあたる覚如上人が親鸞聖人の三十三回忌にあわせて報恩講式を著して形式を整え、後に勤行作法が定められて、御正忌報恩講の形が完成しました。これを機に本山、別院以外の一般の寺院にも報恩講は普及しました。浄土真宗の各派の御本山では七日間営まれるところもありますが、一般の寺院では御命日より前に引き上げて法要を勤めることが多いようです。

この法要は浄土真宗においては、お盆やお彼岸よりも重要な仏事であり、浄土真宗の寺院では必ず営まれる年中で一番大切な行事です。

戦前は、各お檀家さんの家でもこぞっ

て自宅報恩講を勤め、家の仏壇で法要を営み、お寺ではその時期になると毎日報恩講をお勤めするために走り回ったと聞いています。

報恩とは恩に報いる、つまり浄土真宗を開いてお念仏の教えを説いてくださった親鸞聖人に感謝する意味はもちろんのこと、私達が生きていくために必要な人や物、すべてに感謝する心を年に一度、再確認する大切な機会です。

ごちそうさまの心

私達が日頃何気なく暮らしている中で、実はちょっと振り返ってみると、ものすごくたくさんの人や物のおかげ

であることに気づきます。毎日の食事ひとつでも、お米とそれを作ってくださる農家の方々、野菜、肉、魚、どれをとっても私達の生活に欠かせないものです。それを作ってくださる方々、牛や豚、鶏を育ててくださる方々、船で海に出て新鮮な魚を獲ってくださる方々、その方々がいなければ私達はそれらをおいしく食べることはできません。そしてそれらのものを運んでくださる方々もいます。水道・電気・ガスもかりです。

ちなみに「ごちそうさまでした」と食後に手をあわせますが漢字で書くと「御馳走様」となります。「馳」も「走」も走り回るという意味です。大事なお

照

常

(3)

客さんをもてなすために走り回って用意してくださったものを御馳走と呼ぶのです。ですから「ごちそうさまでした」という言葉は「ありがとうございます、ご苦労おかけしました」という意味を含んでいること忘れずにいたいものです。

このように毎日の食事ひとつとっても私達は多くの人達に支えられていなければ成り立っていかないということを知られます。

忘れてはいけないこと

お互いに必ず誰かのお世話になって生きています。誰の世話にもなり

たくないとか、誰の世話もしたくないとかそんな都合のよい話はどこにもありません。そのことを教えてくれるのが「恩」とか「おたがいさま」とか「おかげさま」という言葉なのではないでしょうか。昔の人は、もっとも口にしていたはずですが私の口からは出てきません・・・が、恩を知れば必ず口から自然に出てくる言葉があります。「ありがとうございます」です。ありがとうはお金もエネルギーもほとんどかかりません。でもそのチカラはものすごく強いものです。日々のありがとう、人生のありがとうは誰に伝える言葉でしょうか。

ありがとうのお念仏

この人生が終わったら阿弥陀さまがお浄土に生まれさせてくださり仏にしてください。これが人生最後にして最大の御恩です。その御恩を知れば阿弥陀さまありがとうございます、そのこと教えてくださった親鸞聖人ありがとうございます、ありがとうございます、こんな気持ちが出てきませんか？ありがとうございますの気持ちで南無阿弥陀仏のお念仏に変換して、お寺の本堂で声高らかにお念仏申しましょう。

報恩講、ぜひともご参拝ください。

自分が自分になった

背景を知る

それが恩を知る

ということである

安田理深

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 二二一〇七四番
FAX (〇三三) 二九一四〇八番
テレホン法話 二七一六一六番